

【研究発表3】 第11席

「鍼灸医学への文献学的アプローチ」

京都 森和

「鍼灸医学の文献学的アプローチ」とは、鍼灸の古典文献の検討を通して鍼灸医学の本質を明らかにすることをいい、鍼灸医学科学化の重要な手段の1つである。ここでいう科学化とは

- 1) 鍼灸医学を現代の学問的基盤で理解できるようにする
- 2) 多様な日常臨床のどこに普遍妥当があるかを探り、その客観的根拠づくりをする

の二点を意味する。

文献学的アプローチは、鍼灸医学に共通する根拠を古典情報に求め、多角的で多様な情報（文献）を幅広く収集し、これを多次的モノサシで分析し、情報をその訴えに従って組み立て（再構築）、客観的事実にもとづいて結合的に認識する。

この情報収集と処理の過程がフィールド・サイエンス（場の科学）に特有な手法と同一であるので、文献学をフィールド・サイエンスとしてとらえることができる。一般にフィールド・サイエンスは、複雑な要因のからみ合った流動的なフィールド（野外、現場、臨床など）の問題を結合的に処理するのにすぐれた手法である。何がもっとも根本的であるかを現場（フィールド）における現象観察を通して総合的にとらえ、現場に即応した対策を立てることができるので、文化人類学、宇宙工学、生態学、建築学、考古学などの諸分野で応用され、学問的体系化に必要な方法論となっている。

そこで、鍼灸医学の基本様造をフィールド・サイエンス的手法を用いて浮き彫りし、文献学、鍼灸史学の学問的位置づけを行うとともに、鍼灸古典概念の科学化の例として「治神」の科学化をとりあげる。